乾乳牛の「エサ」について
～現場で気付いたこと～

乾乳牛に与える飼料は搾乳が無いため粗飼料中心の内容で良いとされてきました。しかし分娩前には胎児の成長や分娩後の泌乳に備えるため、十分な栄養を補給するよう勧められています。

分娩が近づいた乾乳牛

実際の管理では、分娩予定三週間前から分娩に向けて胎児の急成長や代謝機能の変化が起こることから、この時期を境目に前期と後期に分けて管理を行うことが良いとされています。

今回は、事例を通して乾乳牛飼料給与のポイントについてお伝えします。

現地事例の紹介（Ａ農場）

この農場は経産牛一五〇頭規模飼養の農場です。経営者は泌乳初期のピーク乳量に満足しておらず、なんとか個体乳量を向上させたいと考えていました。

それまでは、乾乳牛に乾草かラップサイレージに配合飼料を一～二kg給与していましたが、乾乳牛用のＴＭＲを自由採食できるように提案しました。

表1　Ａ農場の乾乳牛飼料内容の変化

Ａ農場	泌乳期	乾乳前期	乾乳後期
改善前	搾乳牛用TMR	乾草＋配合飼料	
改善後		乾草主体で乾乳牛用TMRを補給	乾乳牛用TMR主体で乾草を補給
乾乳前期：　分娩50、60日前～分娩2、3週間前まで			
乾乳後期：　分娩2、3週間前～分娩まで			

Ａ農場では、毎日、新鮮な乾乳牛用ＴＭＲを給与するようになったことで、分娩前の乳房の張りが強くなり、疾病も減ったそうです。一年以上、この給与を継続したところ経産牛の泌乳初期の平均個体乳量は左図のように増加しました。

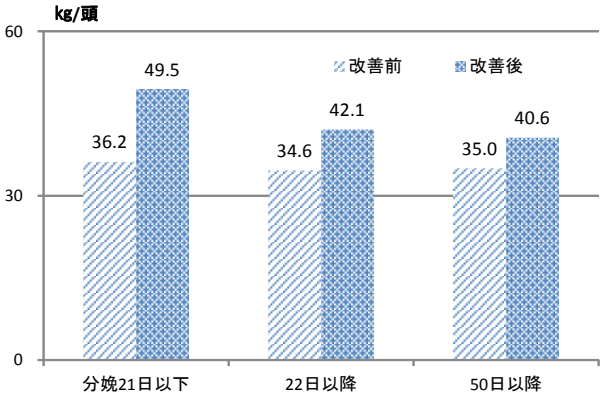

図1　Ａ農場における平均個体乳量の変化

さらに、乾乳後期牛舎に敷料を以前より多く入れたところ、エサを食べた牛達がゆったり横臥するようになりました。

飼料内容の改善と環境改善によって乾物摂取量が向上し、分娩後の泌乳作用に必要な栄養量が充足されたため、乳量の向上に結び付いたと考えられます。

以上、事例から気づいたことをまとめてました。

乾乳牛の「エサ」における基本原則	
乾乳前期	粗飼料主体の飼料給与で、牛の乾物摂取量を満たすよう心掛ける
乾乳後期	分娩後の泌乳生理に対応させるため、栄養給与量を増加させる
牛舎環境	過密にならないよう飼養頭数に注意し、牛が横臥できる環境を整える

「アッ！」と感じた方がいらっしゃいましたら、乾乳牛の「エサ」について見直してみて下さい。

（平成二八年七月執筆）

釧路農業改良普及センター　釧路中西部支所